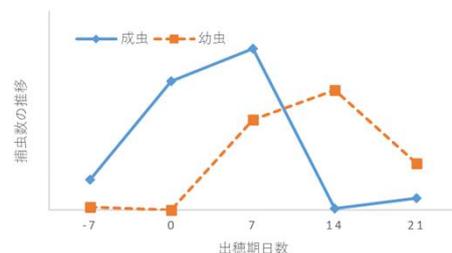


概要

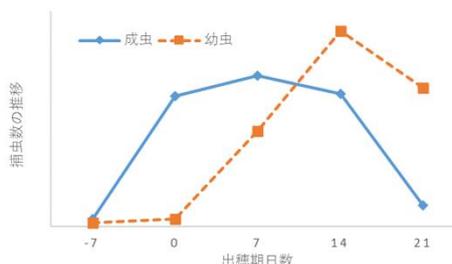
- カメムシ類による斑点米が増加傾向であり、令和元年にイネカメムシ被害による不稔が観察された。
- 令和元年から普及指導センターによるカメムシ類発生状況の情報交換を開始。
- 令和4年、5年に広域調査研究「イネカメムシを中心とした大型カメムシ類の防除体系の確立」で5普及指導センターで発生活消長と防除適期を知るための調査研究を実施。
- 令和5年以降は、広域調査研究結果と農業総合試験場の研究結果から、JA部会等で防除指導を実施。

具体的な成果

- 1 イネカメムシの発生活消長（令和4、5年）
 - 7月出穂期のほ場は、成虫は出穂期から出穂期7日後に、幼虫は出穂期14日後に発生が多くなった。
 - 8月出穂期のほ場は、周辺ほ場の収穫にともなう成虫の移動があるため発生活期間が長くなった。
- 2 ICTを活用した薬剤防除試験（令和4、5年）
 - 栽培管理支援ツールAgriLook愛知県版を活用して水稻出穂期を予測し、薬剤防除試験の散布日を決定。
 - イネカメムシの被害が出ているほ場では、出穂期と出穂期10日後の液剤による2回防除が効果的であった。
 - 液剤が使用できない場合、効果が劣るが、粒剤による防除（出穂期10～3日前と出穂期0～10日後）を提案。
2回目防除を液剤にすると、粒剤2回防除より防除効果が高い。



7月出穂期ほ場



8月出穂期ほ場

普及指導員の活動

平成11年
～平成15年

- 山際のごく限られた地区でイネカメムシの被害あり。
普及指導センター、農業総合試験場で防除試験を実施。

令和元年～

- 普及指導センターによるカメムシ類の発生及び被害状況の情報交換を開始。
平坦地でもイネカメムシによる被害が発生。
令和2年に県発生予察情報でイネカメムシの注意喚起がされる。
普及指導センターによる調査、防除指導を開始。

令和4年
～令和5年

- 広域調査研究「イネカメムシを中心とした大型カメムシ類の防除体系の確立」
（「グリーンな栽培体系転換サポート事業」活用）を実施。
イネカメムシの発生活消長と防除適期を整理。

令和5年
～（継続中）

- 普及指導センターがJA部会、JA水稻講習会、JA広報紙を活用し防除指導を実施。
JA水稻栽培暦の防除適期を修正。
農業総合試験場と連携した最新の研究成果の現場反映。

普及指導員だからできたこと

- ・ 日頃から連携している担い手農家、JAと連携し、防除試験を実施することができた。
- ・ 広域調査研究の結果、農業総合試験場の試験成果をいち早く現場に反映することができた。

イネカメムシを中心とした大型カメムシ類の 防除体系の確立

活動期間：令和4年～継続中

1. 取組の背景

カメムシ類による被害が拡大し、斑点米の発生だけでなく、イネカメムシ等による不稔が発生し減収するほ場が出始めた。イネカメムシは発生活長が不明なうえ、防除適期がわからず複数回防除する事例があった。そのため、発生活長と防除適期を知るため、広域調査研究を実施した。

2. 活動内容（詳細）

令和4、5年度に5普及指導センターで広域調査研究を実施。「グリーンな栽培体系転換サポート事業」を活用した。

(1) 発生活長調査

出穂期を基準に、－7、0、7、14、21日に捕虫網によるすくい取りでイネカメムシの成虫、幼虫数を調査。

(2) ICTを活用した薬剤防除試験

発生活長調査ほ場で薬剤防除試験を実施。

栽培管理支援ツール AgriLook 愛知県版を活用して出穂期を予測して薬剤散布日を決定した。

使用薬剤は、液剤または粒剤を使用した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 発生活長調査

イネカメムシについて、7月出穂期のほ場は、成虫は出穂期から出穂期7日後に、幼虫は出穂期14日後に発生が多くなった。

8月出穂期ほ場は、周辺の8月下旬から始まる水稻収穫に伴うイネカメムシの移動があり成虫の発生期間が長くなった。幼虫は出穂期14日後が最も多く、出穂期21日後も多くなった。

(2) ICTを活用した薬剤防除試験

栽培管理支援ツール AgriLook 愛知県版で出穂期の予測日を知ることができ、計画的に防除試験を実施することができた。

液剤（スタークル液剤10）による、出穂期と出穂期10日後の2回防除が効果的であることがわかった。

粒剤防除は、液剤防除より効果が劣るが、液剤を散布する機械（乗用管理機、ドローン等）がない農家、周辺の他作物へのドリフトに配慮が必要な地区向けに必要な防除方法である。粒剤による防除は、出穂期10～3日前と出穂期0～10日後の2回散布を提案するが、2回目の防除を液剤使用にすると粒剤2回防除より効果が高い。

(3) 県農業総合試験場の試験の反映

薬剤別、剤型別の防除試験の実施を継続している。新しい知見を防除指導に反映させる必要がある。

4. 農家等からの評価・コメント（A氏）

普及指導センターの発消長調査により、カメムシの防除適期がわかり、単収が向上した。乾燥調製の依頼に来る地元の飯米農家に防除適期を教えていきたい。

5. 普及指導員のコメント（普及戦略部・主任専門員・高橋由美）

カメムシ類の防除をしても「防除効果がない」という農家は、適期に防除ができていないことが多い。部会、水稻講習会、JA広報紙等で情報提供をしていくとともに、担い手や地域のリーダー農家に適期防除による防除効果を実感してもらい、「イネカメムシはほ場で防除できる」を現場に広めてほしい。

6. 現状・今後の展開等

今後は、普及指導センターとの発生状況、防除対策、被害状況の情報交換を行い、防除を推進する。

県農業総合試験場による最新の研究成果を普及指導センターによる防除指導に反映させる。